

現代日本における名付け事情とその変遷

—男性名と女性名の変化に着目して—

ウンサーシュッツ・ジャンカーラ (立正大学心理学部 専任講師)

Current trends in Japanese naming practices

—Focusing on changes in men's and women's names—

UNSER-SCHUTZ, Giancarla (*Assistant Professor, Rissho University Faculty of Psychology*)

Abstract

It has been widely reported that Japanese naming practices are changing dramatically. These changes are especially important in regards to names and gender. Because one of the most prominent differences is the decline of the use of name-exclusive suffixes, which usually express their owner's gender, their decline suggests that there may be changes in how gender is expressed in names. This article observed how the characteristics of men's and women's names have changed through using data from an approximately 100 year period from Meiji Yasuda Life Insurance. As a result, it was discovered that at the beginning of the 20th century, men's names were more diverse than women's, but women's names are now similarly or more diverse. In addition, previously popular *-ko* and *-mi* suffixes for women are now essentially out of use, and men's suffixes have all changed. Finally, there were no names that ranked in the top-10 for any year for both men and women, and the pool of kanji common between men's and women's names was small. From these results, it can be argued that instead of suffixes, the use of the kanji themselves can help differentiate the gender of any given name.

Key words : naming practices, onomastics, social change, gender, kanji

1. 変わりつつある日本の名付け習慣

近年においては、日本の名付けにかかわる諸習慣が大きく変わりつつあると広く報告されている (佐藤, 2007; 小林, 2009; 徳田, 2004等)。とくに以前と比べ、名前の持ち主の性別を明らかにするという名前特有の接尾辞が衰退しているようだ。例えば、下記の例1を観察しよう。

例1: 「洋子」 「秀樹」 「和也」
「祐介」 「理恵」 「直美」

生活の中で例1のことに合った経験がなくても、恐らくほとんどの人にはそれらが名前として認識されるであろう。また、例1の名前をそれぞれ「ようこ」「ひでき」「かずや」「ゆうすけ」「りえ」「なおみ」と読もうとする人も多いことが予想される。さらに推測すれば、各名前に見られる最後の一文字という名前特有の接尾辞 (「-子」「-樹」「-也」「-介」「-恵」「-美」) を一見するだけで、直に女性名なのか男性名なのかを見極めることができるだろう。つまり、こうなる

のである。

例2: 「^{ようこ}洋子」 = 女性名、 「^{ひでき}秀樹」 = 男性名、
 「^{かずや}和也」 = 男性名、 「^{ゆうすけ}祐介」 = 男性名、
 「^{りえ}理恵」 = 女性名、 「^{なおみ}直美」 = 女性名

実は、上記の名前がどれも過去100年以内に、明治安田生命保険が公開した上位10位の名前のランキングに入ったものであり、多くの人にとっては、日本の代表的なものだと感じ取れるであろう。しかしながら、以前頻繁に見られた女性名特有の「-子」の接尾辞が衰退している報告が数多く見られ (橋本・井藤, 2011; Komori, 2002)、男性名でも、以前有力だった名前にしか用いられない名乗り訓を使用した2文字4拍の名前 (「^{よしひこ}義彦」や「^{たかのぶ}孝信」) や過去に頻繁に見られた接尾辞がなくありつつあるという報告もある (佐藤, 2007; Komori, 2002)。その代わりに、どのような名前が流行しているのかといえ、下記の例3のようなものである。

例3: 「花音」 「悠真」 「蒼空」

「結愛」「大翔」「美桜」

冒頭の例1と同様に、例3の6つを見ては直に名前だと分かる人はきっと多いであろう。例3のリストは、現在(2015年末)から過去5年に明治安田生命の公開した上位10位に入ったもので、非常に人気なものだと言えよう。一方で、名付け親が求めている読み方は決して明らかだと到底言えないのである。実は、明治安田生命の公開データでは、漢字に対する読みが振られていないため、確かにこう読まれている、とはどれに對しても言えないのだが、例1の名前の可能な読みは例3と比べて少なく、代表的な読みがより明らかなようだ。例えば、現在16万件以上の名前が登録されているお名前辞典(2016)で例1の名前をランクインしたときの性別で検索した場合、6つ中3つには一つの読みのみ登録されている。また、複数の読みが登録されているとしても、どれが最も代表的なのがすぐに確認できる。

例えば、4つで登録読み数が最も多かった「和也」の可能とされている読みを google 検索で調べてみては、「かずや」は2番目に多い「かずなり」より3倍多い件数を示している(358,000件対114,000件)。さらに、「かずなり」の件数の多くは、長年人気のアイドルグループ・嵐の二宮和也と関連しているようだが、「二宮」を排除した検索にすると、「和也」と「かずなり」の件数は35,900件に下降する。こういったことから、「和也」の代表的な読みは「かずや」だと考えられるが、同様なことは、例3の名前についてはできないのである。少ないものでは、「悠真」には4つの可能な読み(「はるま」「ゆうしん」「ゆうま」「ゆま」)が登録されているのだが、最多の「結愛」には54個の読みが登録されている(「ゆあい」「ゆいな」「ゆうめ」等)。なお、例2の読みは、「和也」-「かずや」と同様に、お名前辞典(2016)で登録されている読みのうち、漢字と読みの組合せで google 検索して最も件数が多いものである。

佐藤(2007)や徳田(2004)によると、このように音読みと訓読みを混ぜたものや、一般的な読みを変更して読ませるという名前が近年増えており、今日という一般的な名前になりつつある。だが、新しい名前の不思議な特徴は、読みにくいことだけではない。実は、例3と例1には、女性名なのか、男性名なのかと比較的明確だという重要な共通点があるのである。もう一度お名前辞典の結果を参考にすれば、例3の名前に對して、どれも男性名としても女性名としても登録されている。だが、数で言えば、下記の表1のように、男性名として上位10位に入ったものには男性名のバリエーションが多く、女性名として上位10位に入ったもの

のには女性名のバリエーションがより多い。

表1 例3の上位10位上の性別とお名前辞典の登録件数

明治安田生命の公開データ	名前	性別	お名前辞典での登録件数	
			男性名	女性名
	花音	女性名	1	16
	悠真	男性名	4	2
	蒼空	男性名	9	6
	結愛	女性名	1	54
	大翔	男性名	13	1
	美桜	女性名	1	12

換言すれば、例3の名前はどちらとしても見られることがあるとは言え、習慣的に性別がほぼ決まっている。実際に、どれが女性名でどれが男性名なのかを判断してもらった場合、多くの読者も明治安田生命の公開データでランクインした性別を当てるのではないかなと思われるのだが、これは実に重要な点である。なぜかというと、例3の名前のどこに女性らしさ・男性らしさが隠れているのかが不明だからである。一方では、例3の6つの名前には、例1のような性別を示す接尾辞が見られず、女性名・男性名であることを直ちに伝えるといった構造的特徴が一つも見られない。他方では、実際の読みが確かではないため、名前の音声的特徴・俗にいう「響き」から性別を推測することもできない。つまり、名前の性別を区別するための構造上の心得もなければ、音声上の心得もないのである。

このように日常生活の中で無意識にも性別が見分けられるため、名前が本人の性別を表すことを至って当たり前のように感じる人が多いのだろう。しかしながら、性別を表すことは名前の本質的な特徴だとは到底言えない。たしかに性別が明瞭であればその名前が指しうる人物が限定され、人を見分けるために効率的だと考えられる。だが、名前で性別を表すことはあくまでも社会的な習慣であり、それが重視されるかどうかは、その社会によるのである。そもそも、ジェンダーそのものが社会によって構築されていることを考慮すれば、社会によって名前で性別を表す習慣も異なるのが当然であろう。

Liebertson & Bell (1992) が指摘するように、名前には中心的な社会的価値観が多く潜んでいるため、名付け習慣に着目することにより、社会変化を観察することもできるであろう。実際に、こういった社会的習慣の根強さが故に、子どもの性別が名前から一目瞭然でなければならぬことが法律によって義務付けられている国もある。例えば、フィンランドの1985年の命名法

では、名前が認められない条件の一つは、女性に対する男性名、あるいは男性に対する女性名であることである (Ministry of Justice, Finland, 2016)。しかしながら、性別を表すことはあくまでも社会的習慣であるため、その必要性が感じられなくなり、義務ではなくなった例も見られる。近年までは、ドイツでは、長らく(1)名字を名前として付けること、またモノを指す名詞を名前として付けることが禁止されており、(2)子どもの性別が名前から区別できることが義務付けられていた。だが、2008年の判決の結果、(2)が廃止されたのである (Bundesverfassungsgericht, 2008)。アイスランドにも、フィンランドと似たような法律がある (Willson, 2009) が、これからドイツと似たような変化が見られる可能性が高い。根拠として2013年の判決が挙げられる。当時認められていなかったが、生まれた時から習慣的に男性名を使用していたとある15歳の女性に対して、自分の名前を使う権利があるという理由より、その男性名を使うことがレイキャヴィーク地方裁判所によって認められた。このことより、性別を表す義務を超える人権として名前に対する自由が認められる可能性がある (Helgason, 2013)。

一方、日本ではこういった条件が最初から存在せず、子どもの名付けは比較的自由に決められる。もともと、明治時代以降の日本における名前に対する規制はほとんどすべて名前に用いられる記号にかかわるものであり、現在、仮名・常用漢字・人名用漢字・踊り字を用いたものであれば、有効とされる (人名用漢字の誕生について、円満字 (2005) が詳しい)。名前に関する訴訟の判例に従えば子どもに対して有害だとされる名前が断られる可能性もあるが、徹底的なものはまだ見られない。(有害な名前が親権の濫用という条件付き判決の悪魔ちゃん事件については、井戸田 (2003) を参照したい。) しかし、性別に関しては、そういった規制は一切あらず、名前ですす必要は義務付けられていないため、曖昧なものにしても差し支えはない。現に、近年の名前の特徴の一つはユニセックス、つまり男性名としても女性名としても使えるものが増えているという見方もある (佐藤, 2007)。実際に、習慣的にどちらか片方の方が多いとは言え、例3の名前がすべて男性名としても女性名としてもお名前辞典で登録されているのに対して、例1の名前は「直美」を除き、どれも男性名もしくは女性名、そのうちどちらか一つだけとして登録されている。しかしながら、この点については、十分に検討が進んでおらず、まだ正確な傾向として認めるべきか、情報不足である。尤も、アメリカ合衆国についても類似した主張が見られたのだが (Barry & Harper, 1982, 1993)、量的な検討ではユニセックスな名前は僅かに微増しているだけだという結果を示す

研究もある (Lieberson, Dumais, & Baumann, 2000)。

もし、日本でユニセックスな名前が本当に増えているのであれば、それが社会的価値観の変化と関係している可能性が高い。近年の俗にいう「キラキラネーム」や「DQN ネーム」、すなわち読みにくく、変わった漢字の用法が見られる名前が流行している裏に、公共性の喪失 (小林, 2009) や個人主義化とそれにまつわる価値観の一般化 (Ogihara et al., 2015) が理由として挙げられている。その反面、20世紀の社会的な大変化と言えは女性の社会進出が思い浮かぶ人も多いだろうが、男性と女性の名付けの仕方について未知のことが多いため、そういった価値観がどの形で名前に表現されているかは不明である。上記で示唆したように、接尾辞がなくても、男性らしさ・女性らしさが近年の名前のどこかに残っているようだ。社会的変化と名前の性別の見分け方の関係を明らかにするためにこそ、男性名と女性名の傾向を再確認する必要があるであろう。こういったことを踏まえ、本研究では明治安田生命が公開した名付けに関するデータを活用し、最も頻繁に見られる名前が読み取れる傾向を概説してから、男性名と女性名における変化を観察していく。

2. 方法

近年の名付け傾向を研究するのに最も頻繁に用いられている資料の一つは、明治安田生命の公開データである。明治安田生命 (2015a, 2015b) は、毎年加入者に生まれた子どもに付けられた最も人気だった名前を発表しているほか、1912年まで遡り、最頻だった上位10位の表記別の名前に関するデータを公開している。この明治安田生命の公開データは、大正時代以降の名付け傾向を把握するのにことに貴重な資源である。なぜなら、日本の命名事情に関するその他の資源は、1880年より5人以上に付けられた名前を全部公開しているアメリカ合衆国の社会保障局の歴史的な名付けデータ等と比べると、非常に乏しいからである。このことより、名前の歴史的傾向とその中における変遷を観察するために、1912年～2015年までの公開データを用いることにした。具体的に、各年の最も人気な漢字名 (男女別・上位10位ランクまで) をまとめた上、次のことを計算し、検討を行った。なお、複数の名前が同位にランクインされた年もあるため、上位10位の名前の個数が10個を超す年もある。

1. 各年について、前年のものと比べの名前の回転率を計算した。ここでいう回転率とは、前年の何割が翌年もランクインしたのかを示すもので、その年に新しくランクインした名前の数をその年のランクインした名前の数で割って計算する。

2. 名前に見られた接尾辞的な漢字を含んだ名前の個数を算出した。なお、本研究では、女性名か男性名のどちらか一方のみで5回以上名前の最後に出現した漢字や通常の読みからして類似した漢字を、接尾辞的な漢字とする。
3. 表記上異なる名前の個数と延べ数を算出し、男性名・女性名のどちらとしても用いられるものの有無を確認した。
4. すべての名前に見られる漢字を男女別にまとめて男性名のみ・女性名のみ・男性名女性名両方に見られる漢字のリストを作成し、それぞれのタイプに見られる異なる漢字の数を確認した。

3. 結果

最も人気な名前に見られる傾向：回転率

図1は、明治田生命保険の上位10位の男女別回転率を示している。回転率が高ければ高いほど、前年見られなかった名前がより多く見られたことと解釈できる。全体的に、1913年に男性名・女性名がともに0.3という回転率を示したのだが、それ以降回転率が少しずつ下がっていく。1921年に男性名の回転率が最低の0.1にまで下降した。また、その翌年の1922年に女性名の回転率も0.1に下降した。それ以降、男性名の回転率が一旦上昇し、1941年と1944年に、再度0.1に下降した以降、ゆるやかな上昇傾向に入り、それが今も続く。一方、1934年から1988年の間に女性名の回転率が、ランクインした名前がすべて前年と同じだという0.0まで急落することを9回も繰り返し、回転率が低い傾向が長年続いた。しかし、1988年を境に、回転率が急増し、今も続いているようだ。実際に男性名と女性名が最高の回転率を示したのはそれぞれ2011年と1996年だった

が、現在も、ことに20世紀の上中旬と比べ高い回転率を示している。

このように、(1)性別にかかわらず回転率が徐々に上がっている、(2)だが男性名の方が、回転率が高い傾向にあることは確実に言える。ことに男性名の方が以前から回転率が高く、対応のあるt検定の結果、その差が有意であることも確認できた(男性名の平均回転率: 0.34、女性名の平均回転率: 0.24; $t(102) = 6.50, p < .05$)。だが、別の見方をすれば、実は女性名の方が、変化が激しいとも考えられる。女性名の回転率が数回0.0に急落したから当然だが、回転率が最も低い年 ($x=0.0$ 、1934年等)と、最も高い年 ($y=0.64$ 、1996年)の相対的变化 ($|x-y|/y$) は100%であり、男性の88.88% ($x=0.1$ 、1921等; $y=0.82$ 、2011年)を上回っている。

最も人気な名前に見られる傾向：構造上の特徴

ところが、上記のようにランクインした名前の回転率だけを頼りに名前の変遷を観察するのは、日本における名付け習慣を把握するには不十分なのかも知れない。他言語と比べ、日本語は新しい名前の造語に比較的寛容であることはすでに本田(2005)によって指摘されている事実である。ところが、ある単語が一般名詞ではなく、名前であることが区別しやすく示すために「名前らしさ」が必要だと考えられる。その点では、日本語では「名前らしさ」が作りやすい。ことに名前にしか見られない接尾辞(女性名の「-子」や「-美・実」、男性名の「-郎・朗」や「-希・樹」が多様なため、他の語基(例1でいう「直」や「秀」)に接尾辞を付けるだけで、「名前らしい」名前を創造することが可能である。こういった特殊な接尾辞の他に、名前にしか用いられない名乗り訓(「義」や「健」といった読

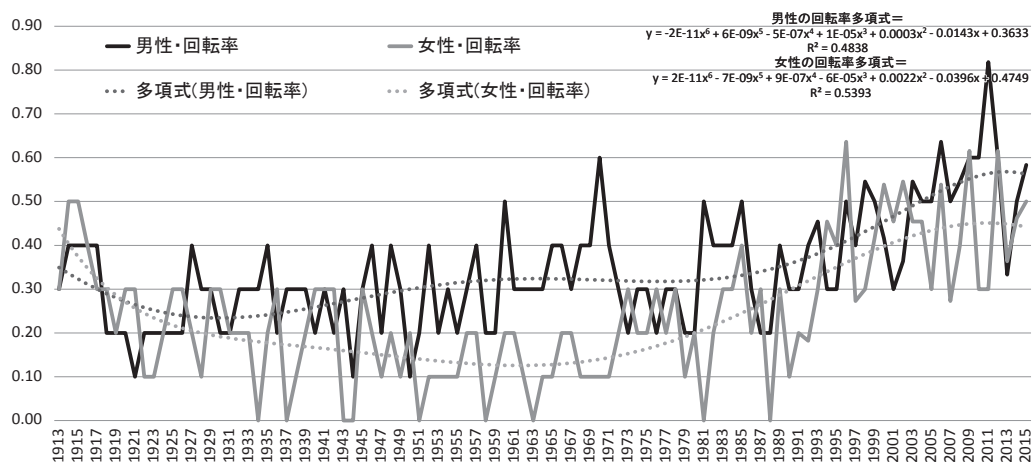


図1 上位10位の名前の回転率 (1913年~2015年まで)

み)も、日本語の名前の生産性の高さの秘密であろう。このことより、名前そのものよりも、名前に見られる構造やその他の音声的・表記的特徴を観察した方が、変化のあり方を把握するのに有効だと考えられる。

実際に、名前の特徴によって上位10位の名前をさらに分類した場合、回転率だけでは見られなかった傾向が浮き彫りになる。まず、女性名については接尾辞的な機能があると思われるものが3字(「-子」、「-美」、「-奈」)見られた。その中、一般に日本語の典型的な女性名とされている「-子」が付く名前が、20世紀の前半から少しずつ普及し、1921年からの35年間、上位10位の全名前が「-子」の付く名前となった(図2)。しかしながら、1956年を境に、「-子」の付く名前が減少傾向に入り、1986年に「-子」の付く名前が初めて上位10位に入らなかった。それ以降、「-子」の付く名前がまったく見られなくなったというわけではないが、多くても一つまでという傾向が2015年の最新データに至るのである。また、「-子」に次いで代表的だとされることが多い「-美」の付く名前でも、似た傾向を示している。「-子」の付く名前の減少に伴い、「-美」の付く名前は1950年代後半より徐々に上位10位に出現するようになった。だが、「-美」の付く名前は「-子」の付く名前ほど普及せず、1990年代より上位10位に入るものは毎年多くても一つに留まっている。また、1990年代より「-奈」の付く名前が上位10位に入ることがあったが、割合としても「-子」の付く名前ほど一般化しておらず、多くても15%強に過ぎない。その他に、接尾辞の他に、仮名による名前も女性名の特徴の一つだと言われている(Taylor & Taylor, 1995, p. 334)。だが、20世紀の始まりには多かったとはいえ、その出現率も徐々に減少し、高かったとき7つも見ら

れた仮名による名前は、近年では多くても2つほどしか見られない。1960年代以降の女性名における変更の一つとして、仮名による名前の増加が挙げられている(円満字, 2005, p. 104)が、全体的に「多い」とは言い難い。なお、仮名による名前は、男性名の上位10位には一度も見られておらず、女性名の特徴とまでは行なくとも、女性名に見られる特有な表記法だと言えよう。

興味深いことに、女性名と比べ、男性名に接尾辞がより多く見られている。明治安田生命保険の過去データには名前の読みが記されていないため、最後の1字の読みを推測し、同じように読まれていると思われる漢字をグループに分類した結果、図3に示す5つの接尾辞が得られた。だが、異なる接尾辞が多いとは言え、女性名とは違い、男性名における接尾辞は多くても上位10位の名前の40%に過ぎない。また、女性名同様に、20世紀の始まりに人気だったものは、現在ではほとんど見られなくなっている。例えば、「-お(夫・男・雄)」の付く名前は1913年と1916年に上位10位の40%を占めたのだが、1951年を境にまったく出現しなくなった。また、「-や(哉・也)」も、1960年代より上位10位に出没するようになったのだが、1989年に40%を占めた以来、急激に減少し、今ではもはや一つも上位10位には入らない。だが、代わりに「-と(人・斗・翔)」といった新接尾辞も新しく誕生しているため、接尾辞の付く男性名が近い将来になくなる見込みはなさそうである。この結果を踏まえ、女性名と比べ、男性名では接尾辞がまだ機能していると言えよう。さらに、その直接な結果として、多くの場合男性名の最後の字だけを見ては、性別が区別できることが多いであろう。

このように、「-子」や「-美」のような名前特有の接尾辞が、少なくとも女性名では他の形でも一般的で

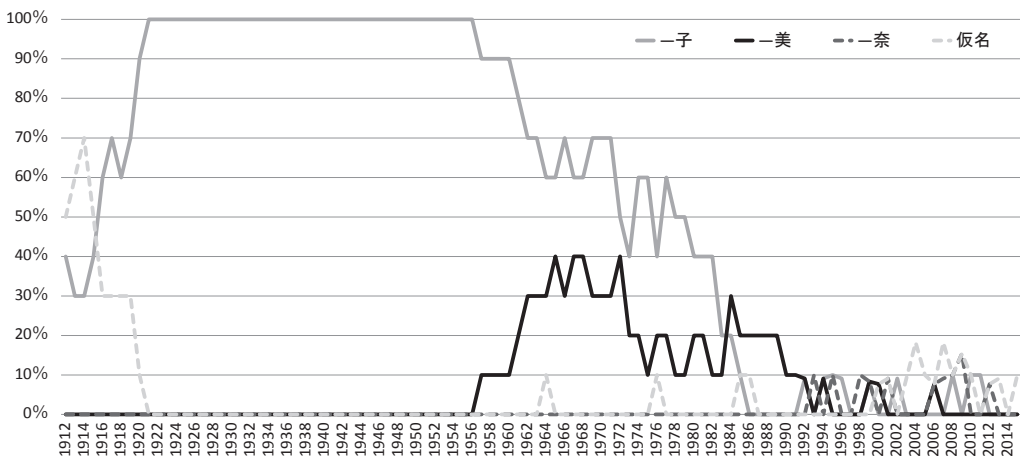


図2 女性名—上位10位における接尾辞および仮名による名前の変遷

はなくなりつつあるようだ。ならば、女性名に頻繁に見られる特徴が他にあるのであろうか。可能性の一つは、名前に用いられる漢字の数である。1960年度より、万葉仮名のように一つの音に対して漢字を一つ当てる(例:「真^ま由^ゆ美^み」に対して「真^ま由^ゆ美^み」、「雪^{ゆき}子^こ」に対して「由^ゆ紀^き子^こ」)表記法を用いる名前が増えたという分析も見られる(円満字(2005)によってまとめられている)。それならば、音節数によって3文字の名前も増加したのではないかと推測することができる。また、接尾辞が見られないのであれば、今まで接尾辞が付いていた語基だけが名前となっている可能性があり、必要な文字数が減少したとも考えられる。こういったことより、名前に用いられる文字数が重要な指標だと推測できる。

図4に示すように、この期待は一部支持される。1990

年代半ばを除き、どの時代でも2文字の女性名が最も頻繁に見られる。しかしながら、3文字の名前が、たしかに1960年代中多少増加したようだが、その前後でも近い割合で見られていたため、顕著な傾向とまでは言えないであろう。それに比して、1文字の名前は確実に増えている。1文字の名前が、初めて上位10位に入ったのは1973年だったが、それ以降、徐々に増加していったことが分かった。しかし、その頂上(60%)に達したのは1996年である。今でも見られるが、1文字の名前は少し前の流行だったのではないかと、という印象が受けられる。

一方、接尾辞と同様に、文字数の使用による時間的変遷は男性名において顕著に見られる。女性名と比して、男性名の上位10位に3文字のものがほとんど見ら

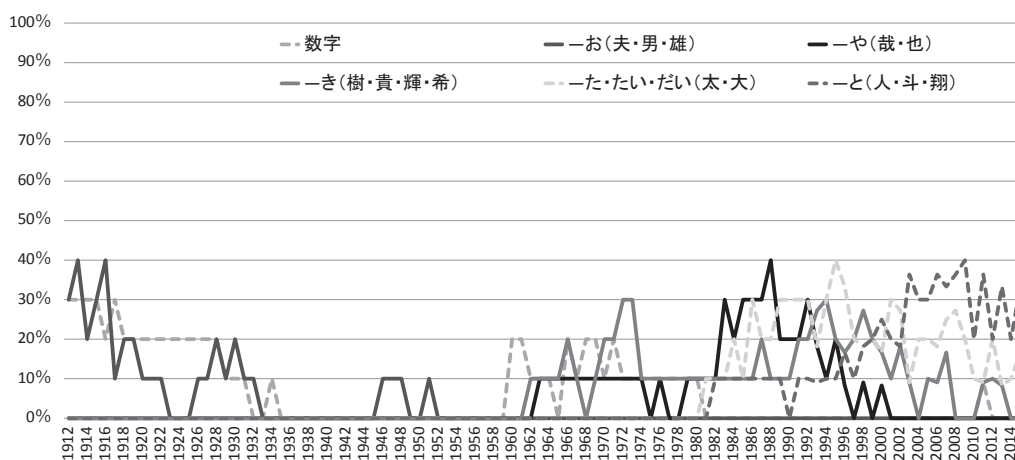


図3 男性名—上位10位における接尾辞の変遷

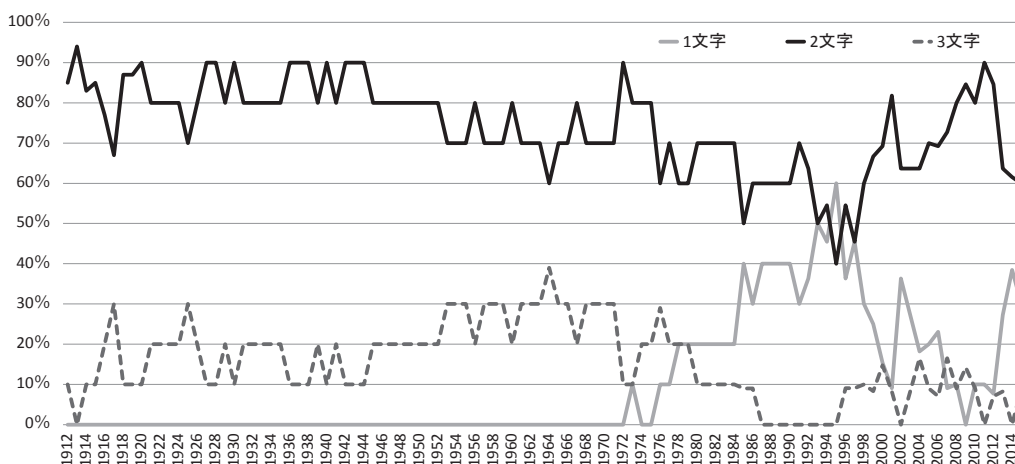


図4 女性名—上位10位における1文字名・2文字名・3文字名の変遷(仮名による名前を除き)

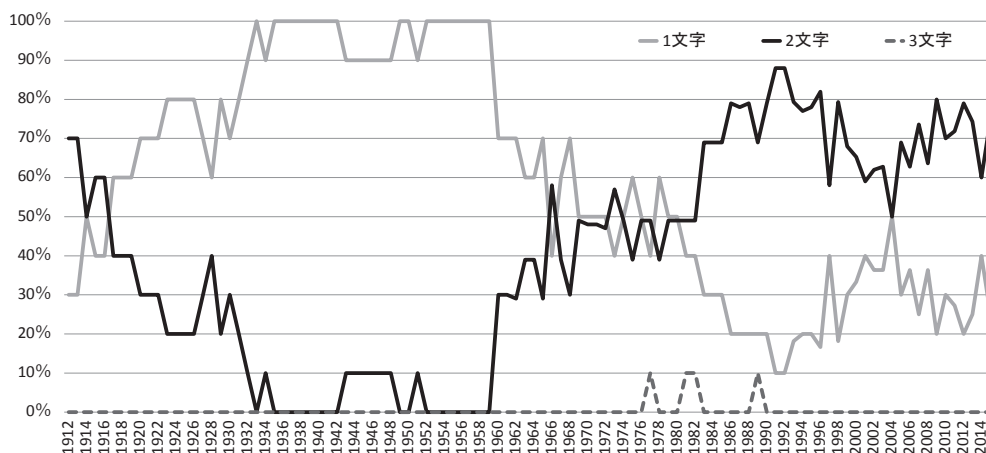


図5 男性名・上位10位における1文字名・2文字名・3文字名の変遷

れないことがまず挙げられる（図5）。1977年・1981年・1982年・1989年に「健太郎」が上位10位に入った4回を除き、3文字の名前が見られなかった。それに比べて、1文字の名前と2文字の名前が有意な負の関係にある（ $r(102) = -.99, p < .01$ ）。1912年より、2文字の名前が徐々に減少し、1933年に初めて一つも見られなかった。その代わりに、1文字の名前が増えていき、100%を足した期間が3回、数年をかけて続いた（1935年～1942年、1949年～1950年、1952年～1959年）。ところが、1959年を境に1文字の名前が減少したのに対して2文字の名前が再度増加し、1981年より2015年の最新データに至るまで2文字の名前が最も頻繁に見られた。2015年のデータでは、1文字の名前が25%、2文字の名前が75%となり、現在では男性の名前の大きな特徴の一つは、2文字を用いることだと考えられる。

最も人気な名前に見られる傾向：表記上の特徴

これまでの結果から、男性名の方が、女性名と同様もしくはそれを超える変化を示している印象が持たれやすいであろう。しかしながら、事情はそう簡単ではない。実は、1912年～2015年の100年強、見られた名前の延べ数とその異なる名前の数である総数を観察すると、違う見方が可能となる。回転率に限って言えば、女性名の方が男性名ほど大きく変わっていないようだが、女性名の延べ数・1,067個に対して、総数が147個となった（表2）。一方、男性名は延べ数1,057個ランクインしたのだが、総数が129個に過ぎない。延べ数を名前の総数で割った値を平均出現回数とすれば、女性名の平均出現回数が男性名の平均出現回数に比べ低いのである（7.26回対男性名の8.19回）。つまり、今までランクインされた名前がより多く出現しているのは女性

名ではなく男性名である。この差は有意ではなかったが、少なくとも、女性名は男性名ほど多様だ、と言えるであろう（ $t(274) = 6.50, p > .1$ ）。

表2 名前の延べ数および総数とそれらの平均出現回数

性別	異なる名前の個数	平均出現回数	SD
女性名	147	7.26	8.49
男性名	129	8.19	9.64
男性名・女性名ともに見られた名前	0		

名前に用いられる漢字についても、似たことが言える。女性名に用いられた異なる漢字（踊り字「々」を含む）が合計101字になったのに対し、男性名ではそれが95字になった（表3）。仮名による名前も考慮すれば、女性名の表記法がより多様という結果になる。名前そのものとは異なり、女性名に見られた漢字の平均出現回数は20.18回で男性の15.82回より高かった。だが、その標準偏差値が62.89で非常に高いことから推測できるように、外れ値があるのである。具体的に、長年人気でそれぞれ延べ数586回、243回も名前に用いられた「-子」と「-美」の接尾辞が、他の漢字よりもはるかに多くみられ、女性名における漢字の平均出現回数を膨張させているのである。この2字を除外すれば、女性名における漢字の平均出現回数が12.21回に落ち、男性名における漢字の出現回数を下回ることになる。現在「-子」と「-美」が頻繁に見られなくなっていることを考慮しては、最近の女性名の方が、用いる漢字がより豊富だと推測できるであろう。

表3 全名前に見られる漢字の個数とそれらの平均出現回数 (男女別)

名前に見られる漢字	個数	M	SD
異なる漢字 女性名	101	20.18	62.89
男性名	95	15.82	17.81
全名前	179	19.78	49.03
17字:			
男性名・女性名の 共通漢字	海・結・幸・弘・浩・勝・昭・ 真・正・清・智・直・明・優・ 洋・陽・和		

上記で観察したように、ユニセックスな名前が増えているという主張が見られるのだが、少なくとも上位10位の名前に限って言えば、共通の名前が一つも見られなかった。さらに興味深いことに、女性名と男性名の両方に見られた漢字は17字のみとなった。女性名に見られる接尾辞が衰退しつつあることより、性別を一目瞭然にする習慣が弱まっているのではないかと推測する人もいると思われる。だが、共通漢字が少ないことから、漢字そのものから、女性名と男性名の区別が簡単だと考えられる。現に共通漢字の中に、近年見られなくなっているものが多い(表4)。また、事実上男性名・女性名にしか見られなくなったものもある。その一例は「幸」である。「幸」は男性名と女性名の両方

に見られるのだが、上位10位の男性名に使用されたのは1931年が最後であるのに対して、1997年まで女性名の上位10位に見られ続けた。数だけ見れば、男性名にはより多く(29回)利用されてきたのだが、早い段階から男性名として利用されなくなったことを考慮しては、事実上女性名のみを用いる漢字だと言えるであろう。さらに、そうして片方のみに見られるようになったもののほとんどは、先に女性名に見られなくなったのである。性別によって、最後の出現年が10年以上離れているものが9字あったのだが、上記の「幸」および「明」を除き、残り7字はすべて男性名に残ったようだ。

4. 考 察

上記で見てきた結果をまとめれば、次のことが言えるであろう。第一、性別にかかわらず、この過去100年強、名前の傾向が大きく変化してきた。第二、回転率だけで言えば、男性名の方が、もともとバリエーションに豊富であった。だが、近年では女性名の方が、変化は急激で、男性名の豊富さに近づきつつある。第三、最近の名前の重要な傾向は、漢字によって性別が見分けられることだと考えられる。過去と異なり、接尾辞だけで近年の名前の性別を区別することができるとは限らない。むしろ、男性名に接尾辞が依然として見ら

表4 男性名と女性名の共通漢字の出現年と合計使用回数
*男性名に最後に見られた順。斜体は10年以上のギャップを示す。

漢字	男性名		女性名	
	最後に出現した年	使用回数	最後に出現した年	使用回数
幸	1931	29	<i>1997</i>	<i>16</i>
昭	1942	13	1944	17
弘	1947	41	1947	2
正	<i>1954</i>	<i>2</i>	1913	34
清	<i>1955</i>	<i>27</i>	1924	8
勝	<i>1958</i>	<i>14</i>	1945	4
明	1959	19	<i>2000</i>	<i>12</i>
浩	1971	44	1960	9
洋	<i>1985</i>	<i>7</i>	1967	22
直	<i>1996</i>	<i>9</i>	1972	23
智	<i>1998</i>	<i>1</i>	1984	50
優	2010	1	2012	26
海	2011	2	2009	48
結	2015	7	2015	5
真	2015	25	2006	1
陽	2015	14	2015	30
和	<i>2015</i>	<i>32</i>	1960	36

れることから、接尾辞が見られないものは女性名かもしれないという消極的な推測法になるのである。だが、男性名と女性名に見られる共通の漢字が少なく、その中でも、両方同様な頻度で見られることがないことより、ある名前が男性名なのか女性名なのかを漢字そのものから読み取れることが多いであろう。

こういったことを踏まえると、日本語の名前がユニセックスになりつつあるという主張は、支持されないのだろう。むしろ男性名と女性名は、それぞれ新しい特徴を見出しつつあり、決して収束しているわけではない。社会的変化を考慮すると、この結果に対して違和感を覚える人もいであろう。たしかに、年代的に言えば、現在の名付けの傾向が1980年代に芽生えたと考えられ、女性の社会進出と同時時代に根付いたようである。だが、女性の社会進出に伴い名前で性別を示すことが以前ほど重要ではなくなったといった期待は、大きく裏切られるのであろう。そもそも、「-子」の付く名前が1950年代末からすでに減少傾向にあったことを考慮しては、女性の社会進出以前に名付けにおける変遷が起こりつつあった。だが、そういった期待への裏切りがむしろ当然なのかもしれない。名付け習慣も、女性の社会進出と同様に一夜にして変わるものではない。いや、その裏の変化が徐々に累積していき、可視になったところではもうすでに根が深くついていた、といった変化の過程の方がむしろ普通であろう。Lieberson (2000) が論じるように、名付けに影響を及ぼしているものは多数にあり、名付けにおける傾向を一つの決定的な原因と結びつけることは、そもそも無理がある。

このことを受け、日本における名付け習慣の変遷をより正確に把握するために、社会的な変化をより多義的に捉える必要があるであろう。その際にして、他国の名付け習慣における変化と比較することが刺激的なのかもしれない。本研究で見られた傾向と逆に、英語圏では、男性名よりも女性名の方が多様だということが多く指摘されている (Lieberson & Bell, 1992; Lieber-son & Mikelson, 1995; Twenge, Abebe, & Campbell, 2010)。その理由として、英語圏では、女性名は主に響きやイメージといった美的な理由で選ばれるのに対し、男性名が他の家族の人に因んで名付けられることが挙げられている (Rossi, 1965)。だが、男性名の方がもとより豊富だったため、この論理が日本では通じない。むしろ、明治時代以前、女性名の登録が男性名ほどされていなかったこと、また霊的な人格いみなとの結びつきから相手と呼ぶときに避けられていた諱いみな (実名) をつける習慣は原則として女性を対象としなかったことより、女性名は男性名ほど重視されなかったことが示唆される。そう考えると、女性名の方が多様になりつつある

ことは、女性の社会的位置付けの変化に対して重要な意義を持っていると仮定できるであろう。だが、性別によって名付けで重視することが違うのは、一つのヒントだと考えられる。女性名と男性名に見られる漢字がほとんど共通でないことから、性別によって名前に託したいイメージや印象がまったく違うと読み取れる。女性名と男性名に見られる漢字の分類を試みれば、近年の名前の変化に対する理解が深まるであろう。

ユニセックスの名前問題に関連して、もう一つ興味深いことが窺える。英語圏では、男性名が徐々に中性的なものになり、さらに女性的になる過程を経て、女性名として利用されていく傾向がある (Lieberson et al., 2000)。少なくとも明治安田生命の公開データに従えば、似たようなことは日本について言えないようだ。むしろ、漢字こそが名前の性別を見分けるために有効である現在、共通の漢字がさきに女性名に見られなくなるということは、男性名が女性名になるといった簡単な経緯を経ないことを示しているであろう。近年においては、アメリカ合衆国でも性別にかかわらず名前が多様化しており、日本と同様に、個人主義とそれにかかわる価値観の普及とかかわっていることが指摘されている (Twenge et al., 2010)。つまり、日本とアメリカ合衆国でも似た変化に見られるわけだが、やはりその変化がどの形で表されるかは、他の事情によって変わるのである。

このデータだけでは、女性名がさきに男性名になっていく、といったことは断言できず、男性名として利用されてから、女性名でも一時的に流行する、といった変化のパターンも可能であろう。しかし、明治安田生命の公開データを活用するのには限界があることも歪めない。読みが載っていないことより、名前の傾向を十分に把握することができない部分もある。とくに接尾辞の使用については、読みが載っていないことから、一つのものとして認めてもよいのかは、二次的データと推測に頼る他ならない。学校の名簿やその他の二次的データを利用することで、一つのコミュニティ内での名付けにおける変遷を観察するという分析も見られる (橋本・井藤, 2011; Komori, 2002) が、上記を踏まえ、日本における命名事情を十分に把握するために最も重要なのは、新しいデータを開発することである。このことについては、筆者が現在9つの市町村の広報誌の、子どもの誕生に関する記事から抽出した名前のデータ・ベースを作成している途中であり、明治安田生命保険の公開データ(1)に見られる傾向が再現されるかを確認する予定である。

参考文献

Barry, H., & Harper, A. S. (1982). Evolution of unisex

- names. *Names*, **30**(1), 15-22.
- Barry, H., & Harper, A. S. (1993). Feminization of unisex names from 1960 to 1990. *Names*, **41**(4), 228-238.
- Bundesverfassungsgericht. (2008). Verweigerung der Eintragung eines in Indien für Mädchen und Jungen gebräuchlichen Vornamens ins Geburtsregister ohne Hinzufügung eines weiteren, das Geschlecht des Kindes eindeutig anzeigenden Vornamens verletzt Eltern und Kind in Grundrechten [Gerichtssentscheidung]. Bundesverfassungsgericht (December 5, 2008) <http://www.bverfg.de/erkr20081205_1bvr057607.html> (January 29, 2016)
- 円満字二郎 (2005). 人名用漢字の戦後史 岩波書店
- 橋本淳治・井藤伸比古 (2011). 「子」のつく名前の誕生 仮説社
- Helgason, G. (2013). Icelandic teen wins right to use her given name. Huffington Post (January 31, 2013) <http://www.huffingtonpost.com/2013/01/31/blaer-bjarkardottir-icel_n_2589657.html> (February 4, 2016)
- 井戸田博史 (2003). 氏と名と族称—その法史学的研究 法律文化社
- 小林康正 (2009). 名づけの世相史「個性的な名前」をフィールドワーク 風響社
- Komori, Y. (2002). Trends in Japanese first names in the twentieth century: A comparative study. *Asian Cultural Students (International Christian University Publications 3-A)*, **28**, 67-82.
- Liebertson, S. (2000). *A Matter of Taste: How Names, Fashions, and Culture Change*. New Haven: Yale University Press.
- Liebertson, S., & Bell, E. O. (1992). Children's first names: An empirical study of social taste. *American Journal of Sociology*, **98**(3), 511-554.
- Liebertson, S., Dumais, S., & Baumann, S. (2000). The instability of androgynous names: The symbolic maintenance of gender boundaries. *American Journal of Sociology*, **105**(5), 1249-1287.
- Liebertson, S., & Mikelson, K. S. (1995). Distinctive African American names. *American Sociological Review*, **60**(6), 928-946.
- 明治安田生命 (2015a). 名前ランキング2015—生まれ年別名前ベスト10—女の子 明治安田生命 2015年12月2日 <http://www.meijiyasuda.co.jp/enjoy/ranking/year_men/girl.html> (2016年2月4日)
- 明治安田生命 (2015b). 名前ランキング2015—生まれ年別名前ベスト10—男の子 明治安田生命 2015年12月2日 <http://www.meijiyasuda.co.jp/enjoy/ranking/year_men/boy.html> (2016年2月4日)
- Ministry of Justice, Finland. Names Act (694/1985). Ministry of Justice, Finland (January 30, 2016) <<http://www.finlex.fi/en/laki/kaannokset/1985/en19850694.pdf>> (January 29, 2016)
- Ogihara, Y., Fujita, H., Tominaga, H., Ishigaki, S., Kashimoto, T., Takahashi, A., Toyohara, K., & Uchida, Y. (2015). Are common names becoming less common? The rise in uniqueness and individualism in Japan. *Frontiers in Psychology*, **6**:1490. doi: 10.3389/fpsyg.2015.01490
- お名前辞典 (2016). お名前辞典: 赤ちゃん・子供の名前 約16万件から検索できる名前辞書 お名前辞典 2016年 <<http://name.m3q.jp/>> (2016年1月29日)
- Rossi, A. S. (1965). Naming children in middle-class families. *American Sociological Review*, **30**(4), 499-513.
- 佐藤稔 (2007). 読みにくい名前はなぜ増えたか 吉川弘文館
- Taylor, I., & Taylor, M. M. (1995). *Writing and Literacy in Chinese, Korean and Japanese*. Amsterdam, the Netherlands: John Benjamins.
- 徳田克己 (2004). 名づけの心理2: 読みにくい名前の分析 日本教育心理学会総会発表論文集, (46), 623.
- Twenge, J. M., Abebe, E. M., & Campbell, W. K. (2010). Fitting in or standing out: Trends in American parents' choices for children's names, 1880-2007. *Social Psychological and Personality Science*, **1**(1), 19-25.
- Willson, K. (2009). Name law and gender in Iceland. *CSW Update Newsletter*, (June), 8-11.

脚注

- (1) 本研究はJSPS 科研費70632595の助成を受けたものである。

要約

近年において日本の命名習慣が大きく変わりつつあることが広く報告されている。ことに名前特有な接尾辞が衰退しているようだ。これは、名前とジェンダーに大きな意味を持っていると考えられる。なぜならば、名前の特有な接尾辞は原則として持ち主の性別を表しているため、接尾辞における変化は、

日本の名前における性別の表現に影響をもたらしているからである。そこで、過去100年強の最人気の名前の上位10位を公開している明治安田生命のデータを用い女性名と男性名における特徴とその変化を観察した。その結果、(1)20世紀冒頭、男性名の方が多様性に豊富であったが、現在は女性名が同程度もしくはそれを超えるほど多様となりつつある、(2)女性名において代表的とされていた「-子」「-美」の接尾辞は現在ほとんど見られなくなっているだけでなく、男性名における接尾辞も一変している、また(3)上位10位には男性名と女性名の両方にランクインしたものはなく、女性名と男性名の両方に用いられる漢字が少ない、という三点が明らかになった。このことより、接尾辞のではなく、漢字そのものだけで名前の持ち主の性別が区別できることが、現在の名前の大きな特徴と論じる。

キーワード：名付け、命名、社会的変化、ジェンダー、漢字